小林弘人先生を送る

社会学科主任　山　田　信　行

平成 21 年の 3 月をもって、小林弘人先生が駒澤大学を定年退職されます。小林先生は、明治大学大学院法学研究科の博士課程を終えられるとすぐに、わずか 28 歳で本学に専任講師として奉職されました。それから実に 42 年になります。これは、驚くべき年数であり、本学の躍進と小林先生の経歴とはまさに重なるといってよいでしょう。この間に、小林先生は昭和 58 年に文学部社会学科の主任に就任されたことを皮切りに、教務部長（2 回)、大学院人文科学研究科社会学専攻主任、大学院人文科学研究科委員長、さらにはコミュニティ・ケアセンター所長などの数多くの役職をそれぞれ長期間にわたって務められ、本学の発展に貢献されてきました。

小林先生の本学への貢献は、いうまでもなく学内業務に尽きるものではありません。学部および大学院における教育や公務のかたわら、昭和 55 年にはミュンヘン大学に在外研究に赴かれ、西ドイツの社会行政法に関する研究に従事されました。大学が研究機関であることを考えますと、小林先生は研究においてもその成果を発表されることを通じて、本学の発展に貢献されたことになります。

駒澤大学に着任してわずかに 7 年目を向えたにすぎない私は、親子ほども年齢の差があるうえに、大先輩にあたる小林先生とそれほど個人的な親交があるわけではありません。私にとって小林先生の印象といえば、やはりなんといっても文学部教授会が開催される際には、きまって社会学科のその他の教員とは離れた、学部長に近い座席に陣取られ、あたかも議事運営に睨みを効かせるかのように着席されながら、しばしば的確かつ鋭い発言をされていたことが思い

出されます。これも、多数の役職を歴任され、本学の運営に強い責任感をお持ちであることの現れなのでしょう。

さらに、小林先生はたいへんな健脚であると承っています。かなりの長距離を徒歩で踏破されると聞きました。着任早々、病気で入院する羽目に陥ってしまった私は、この話を聞いてつくづく頭が下がる思いがしたことをよく覚えています。本学の姿勢に対する強い意志の現れは、まさにこうした強靭な肉体を基礎にしてはじめて可能になるものなのかもしれません。

少子化による 18 歳人口の減少や景気の急速な後退といった大学が直面する一般的な困難に加えて、本学は現在大きな危機に直面しています。よりによって今このときに、小林先生をお送りしなければならないことは、単に寂しいだけでなく、頼もしい大黒柱を失うようで大きな不安を禁じえません。大きな変革を推し進めようとするとき、ともすれば道を誤ることもしばしばありえます。そんなときに、豊富な経験を背景に大局的な見地から判断ができる小林先生のような方はかけがえのない存在といえましょう。小林先生には今後の御健康とますますの御活躍をお祈り申し上げるとともに、本学の前途に対して、今後ともこれまで同様に厳しく、また暖かい助言をお願いしたいと思います。